

# 北陸石仏の会々報

第 14 号  
平成8年8月5日発行

編集発行

北陸石仏の会 (日本石仏協会北陸支部)

代表 久世 嘉太郎

〒939-13 富山県砺波市太田一七七〇 尾田武雄方  
電話 〇七六三一三二一一二七七二  
振替 〇〇七四〇一三一一九七四

## 如意輪観音の下の弁財天

大野 猪 策

富山市月岡中尾に箱形の弁財天石仏がある。その昔地区の働き盛りの五十才ばかりの男たちが次々と疫病にかかり病死した。そこで村人は、なにか災いがあるのでないかと、騒ぎだした。

村のだれかが如意輪観音石仏の下に、台座のようにになっている箱形の弁財天石仏が「重い、重い」といつていらっしやるのではないかというのである。そこで如意輪観音石仏を降ろし、弁財天の横に移されたものである。ちなみにこの弁財天の高さは四十七センチ、幅四十一センチ、奥行三十六センチである。



正面には  
坐像の琵琶を持つ  
女性像が  
浮彫りさ  
れており  
右側面には「施主  
中川藤次



郎世話人中川弥左エ門嘉永壬午年十月建立」とあり、左側面には「石工甚右エ門中川馬瀬口村若連中同行中権島村稲野村」とある。参考までであるが、月岡三丁目にも同様の弁財天石仏がある。これは、高さ三十七センチ、幅二十九センチ、奥行二十六センチ。右側面に「享和四亥年為三界萬靈二月十五」、左側面に「寒念仏当村若連中願主弥左エ門」、裏面に「作者甚右エ門馬瀬口村」とある。(富山市)

越中東街道石仏巡りに参加して

深山節代



しょぼしょぼと降っていた夜来の雨も、何とかあがり、お日様が新緑にひかりをそそぎ始めた五月十二日の朝、昨年来からの願

いがかたって、石仏巡りに参加させていた

りました。富山に住む

ようになって、この春で十七回目の春を迎えることが出来ました。その間ずっと、富山は私の好奇心をくすぐり続けてきましたが、石仏もその一つでした。自然の

中に入ることが好きな私ですが、山歩きしていて時々出くわす遺跡の案内版、廃屋、苔むして自然と一体化してしまったような石仏。それらを目にしたとき、通り過ぎてしまえば何でもないのじょうが、その土地に迎えていただけるのなら、何か、その土地が語りかけて来るものを聴きたいと思ってしまうのです。

私は、石仏というのはいづいぶん歴史の古いものかと思いましたが、「仏教が日本に伝来してしばらく後の最初の仏教改革の折に、仏教が寺院から出て、時の下級僧侶や遊りの僧たちによって民間に伝えられて行く中で、仏像も信仰の対象として持ち出されたということ。いろいろに折衷曲折ありながら、たくさんの人々に拜んでもらうために直接地上に安置するようになった。そして、耐久性、安定性などを考えて石仏になっていった。」というようなことが、帰りのバスの中でいただいた資料に書かれてありました。

ホトトギスや蛙さんの歓迎の挨拶や、烏へびくんの歓待に心躍らせながらの散策は、有意義な時間でした。宝珠寺の境内をお借りしての昼食時に巡ってきた、土地の方が差し入れて下さった「よもぎ餅」と赤カブ漬けなどもおいしくいただきました。

屋敷神として、墓石がわりになど、土地の方々にとって身近な信仰対象として今も生き続けているようです。道祖神のあの愛らしい姿に、これからも機会あるごとに会いにゆきたいと、もう次の機会を楽しみにしています。

(富山市)

## 北陸石仏の会第十四回例会出席者

### ◇石川県

本谷清子 橋 龍雄 辻井静江 越野久仁子 久保倭香  
 宮下美和子 細井明義 細井好美 ○南外志雄 ○前田 弘  
 ○数内清子 川南外茂子 河島義隆 河島瑞子 齊藤 忠  
 橋くずえ 高田慈久 ○上田信子 ○山田玉枝 小坂俊子  
 佐野恵子 阿部ちよ子 北市スミエ 舞谷久子 桜木康子  
 田嶋正一 田嶋美智 ○久世嘉太郎 嶋 板坂  
 橋 橋 ○白田博以 ○滝本靖士

### ◇富山県

○加藤永子 ○大野猪策 ○小竹一夫 ○坂田和子 ○中川 達  
 ○太田幸子 ○南 金三 ○林 貞子 ○京田千鳥 ○猪谷春江  
 森本朝子 ○深山節代 ○尾田武雄 ○平井一雄 エレンケハダ  
 ◇福井県  
 ○大久保まさ子 ○辻角紀子 ○は会員

## 石仏になられた藤村さん

尾 田 武 雄

北陸石仏の会第十回例会は、平成七年四月九日に羽咋から七尾  
 周辺の石仏探訪であった。この例会は、藤村北陸石仏の会会長と  
 幹事の滝本靖土さんが、計画から準備をしていたが、ほとんど藤

村会長がお世話をなさっていた。

ちょうど、その段取りが終わり会報にその計画を載せ、各会員  
 に発送作業をしているところに、藤村さんの計報を聞いた。あま  
 りにも突然で、我が耳を疑った。なぜなら少し前まで、あの元氣  
 なお声を聞いていたからである。

北陸石仏の会が設立したのは、平成四年十月十九日である。こ  
 れは日本石仏協会北陸支部でもあった。これは全国的には、四支  
 部目の誕生でもあった。その準備段階から藤村さんは、積極的に  
 動かれ、その設立の原動力ともなった。私らは、それに引っぱら  
 れていたものだった。

会長には、藤村さんがなられ、総会は富山で行ない、例会は翌  
 日立山の石仏探訪であった。その後第二回例会は、藤村さんの  
 フィールドである金沢であった。参加者が五十一名で、この例会で  
 は新入会員が二十一名と盛況であり、これも会長の人徳なのであ  
 ろうと、実感したものだ。

新入会員の多くが、「北國新聞」で毎週連載されていたエッセ  
 イ「白き道あり」の愛読者であり、女性の方が多かった。藤村さ  
 んは、そこに石仏写真を連載されていたのであった。

このように新潟、富山、石川、福井の石仏を愛する人々によっ  
 て設立された北陸石仏の会は、会員数も一二〇名になり着々と、  
 発展しようとしていた矢先に、会長を失い悲しみのどん底であっ  
 た。そしてその方向性も失いかけていたようである。

ところで、私事であるが、藤村さんが会長になられて二度富山  
 県の石仏を案内した。砺波の中筋往来と大沢野周辺である。砺波  
 の中筋往来は、私にとって大事な場所で、それは藤村さんが、ほ

とんど一日庄川町から砺波市太田にかけて、歩いて石仏写真を撮られた道筋である。カメラは古い一眼レフのペンタックスであった。そして石仏にカメラを向ける視線が低く、身体全体しゃがみこむように石仏に接せられていた。私はその時、石仏を撮るのではなく、拝んでおられるのだなと強烈に感じた。

その時頂いたのが『野仏紀行』である。その中に「石仏と自身が同化するために、息を止め精神を統一する。シャッターに指をかけ、ほんのちよっと力を入れればシャッターがおろる。そういう状態で、来るべき一瞬を待っているのである。」とある。藤村さんは、石仏と同化するため写真を撮られていたのである。息を止め精神を統一し、もう今ごろ石仏に同化され、石仏になっただけなのかもしれない。

『藤村善雄先生追悼、業績集 努力・根性・持続―技術道と共に』  
(金沢工業大学出版社発行・平成七年十二月二十二日刊)より

### 新潟県 粟島の庚申(金精)様

平井一雄

平成八年六月八〜九日 新潟県石仏の会と日本石仏協会共催の「粟島石仏探訪」に参加した。

北陸石仏の会から私と大野猪策氏の二人であったが、新潟

県と石仏協会合わせて三十五人の石仏愛好家が佐渡ヶ島よりもまだ北方の弧島に渡り中世板碑の多様さ、梵字名号塔の芸術性に魅了されたのである。

板碑の詳細は別に発表されているので省くが内浦集落を一周して目にした民俗信仰遺物のいくつかをカメラに収めたので紹介する。

1、庚申塔 蓮照院址板碑群 写真①

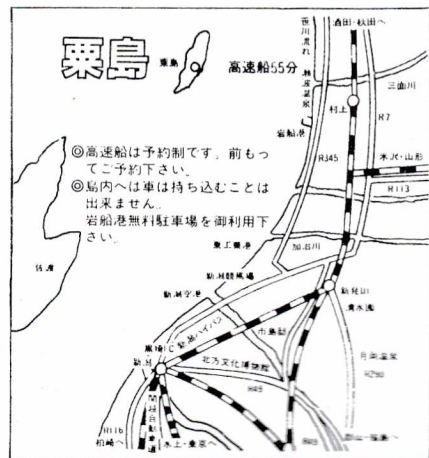
嘉永七年甲寅七月 高さ94cm、幅47cm

男根を意識した自然石に梵字(オン)を頭に庚申塔の文字を刻む。

2、前記板碑群に近い、たぶの木根元中世の阿弥陀仏

(積石仏)の背後

自然石の男根石(銘はない)写真②



①蓮照院址の庚申塔



②男根石

## 北陸石仏の会第十四回例会出席者

### ◇石川県

本谷清子 橋 龍雄 辻井静江 越野久仁子 久保倭香  
 宮下美和子 細井明義 細井好美 ○南外志雄 ○前田 弘  
 ○藪内清子 川南外茂子 河島義隆 河島瑞子 齊藤 忠  
 橋くずえ 高田慈久 ○上田信子 ○山田玉枝 小坂俊子  
 佐野恵子 阿部ちよ子 北市スミエ 舞谷久子 桜木康子  
 田嶋正一 田嶋美智 ○久世嘉太郎 嶋 嶋 板坂  
 橋 橋 ○白田博以 ○滝本靖士

### ◇富山県

○加藤永子 ○大野猪策 ○小竹一夫 ○坂田和子 ○中川 達  
 ○太田幸子 ○南 金三 ○林 貞子 ○京田千鳥 ○猪谷春江  
 森本朝子 ○深山節代 ○尾田武雄 ○平井一雄 エレンケハダ

### ◇福井県

○大久保まさ子 ○辻角紀子 ○は会員

## 石仏になられた藤村さん

尾 田 武 雄

北陸石仏の会第十回例会は、平成七年四月九日に羽咋から七尾  
 周辺の石仏探訪であった。この例会は、藤村北陸石仏の会会長と  
 幹事の滝本靖士さんが、計画から準備をしていたが、ほとんど藤

村会長がお世話をなさっていた。

ちょうど、その段取りが終わり会報にその計画を載せ、各会員  
 に発送作業をしているところに、藤村さんの訃報を聞いた。あま  
 りにも突然で、我が耳を疑った。なぜなら少し前まで、あの元気  
 なお声を聞いていたからである。

北陸石仏の会が設立したのは、平成四年十月十九日である。こ  
 れは日本石仏協会北陸支部でもあった。これは全国的には、四支  
 部目の誕生でもあった。その準備段階から藤村さんは、積極的に  
 動かれ、その設立の原動力ともなった。私は、それに引っぱら  
 れていたものだった。

会長には、藤村さんがなられ、総会は富山で行ない、例会は翌  
 日立山の石仏探訪であった。その後第二回例会は、藤村さんの  
 フィールドである金沢であった。参加者が五十一名で、この例会で  
 は新入会員が二十一名と盛況であり、これも会長の人徳なのであ  
 ろうと、実感したものだ。

新入会員の多くが、「北國新聞」で毎週連載されていたエッセ  
 イ「白き道あり」の愛読者であり、女性の方が多かった。藤村さ  
 んは、そこに石仏写真を連載されていたのであった。

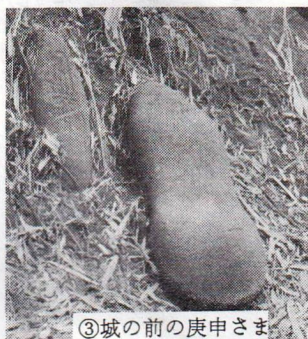
このように新潟、富山、石川、福井の石仏を愛する人々によつ  
 て設立された北陸石仏の会は、会員数も一二〇名になり着々と、  
 発展しようとしていた矢先に、会長を失い悲しみのどん底であつ  
 た。そしてその方向性も失いかけていくようである。

ところで、私事であるが、藤村さんが会長になられて二度富山  
 県の石仏を案内した。砺波の中筋往来と大沢野周辺である。砺波  
 の中筋往来は、私にとって大事な場所で、それは藤村さんが、ほ

3、城ノ前(じょうのまえ)の庚申様

二基の梵字阿弥陀三尊板碑  
写真③

案内してもらった床屋の戸田さんという奥さんは『これは「こうしんさん」といって、この山道を登っていく人が仕事の無事を祈っていかれるのです』と言われた。山の神と庚申様(形状からというに金精様)が習合しているのだろうか。



③城の前の庚申さま

4、山の神祠

写真④

3の(城ノ前)へいく途中の竹藪の中。

石造の狛犬2体に守られているが中は見えない。



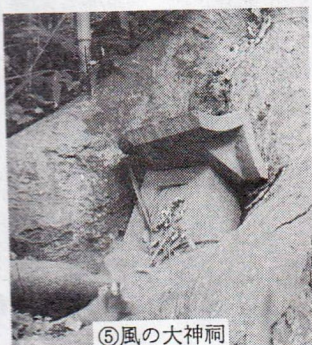
④山の神祠

5、風の大神

石祠

写真⑤

八所神社の神主、前田岩則さん宅の裏、樺の木の根元に抱かれるようにしてまつられた風の神「風の大神」と書か



⑤風の大神祠

れたお礼が3枚収められている。前田宅併設の水屋にも板碑と祠が祭られていて風の神様といわれている。この地方では「風の三郎様」と呼び、9月9日にお祭りをするという。

6、畑の中の祠 写真⑥

前扉の削り掛け二本(十二月)(十三月)と墨書で五芒星のマークを描く。

中には紙の御幣が見えるが何の神様か付近で仕事をしていた主婦に聞いたが知らないという。富山県細入村では雪よけの(バンバ)に鬼の顔を描いたり、「十三月」と書く民俗がある。



⑥畑の中の祠

(十三月)は庶民の暮らしは十二月で終わるのに(十三月)があると思ってる鬼を感わさせるための魔除け(『細入村史』)  
五芒星も魔除けか。  
疫病退散の神様だろうか。

この外にも(治郎作さんの粟島様)、ヤス突き観音堂の金比羅像、土葬墓の実態など民俗の島を堪能して帰路についた。

### 北陸石仏の会第15回例会案内

◎月 日 平成八年九月八日(日) 雨天決行  
 ◎時間 集合 午前九時四〇分 (JR金沢駅西口)  
 解散 午後三時三〇分 (JR金沢駅西口)

◎参加費 五、〇〇〇円(バス代、資料代含む)  
 昼食は各自持参してください。

◎申込 はがきで次の事項を記入の上左記まで(電話はだめ)  
 ×切 八月二〇日(火)

住所・氏名・電話・車の有無  
 〒九三九一三

富山県砺波市太田一七七〇  
 尾田 武雄 氣付

北陸石仏の会  
 〒〇七六三一三二一二七七二

今回の例会は「能登・甘田地区」にみられる「様々な板碑」を中心に「日蓮宗関係の石造物」等を含めて見学したいと思えます。

◎妙成寺(羽咋市滝谷町)。

題目塔、浄行菩薩、笠塔婆陽刻板碑、石鳥居など。

◎氣多神社(志賀町福野)。

普賢板碑をはじめ様々な板碑がみられる。

◎火結神社(志賀町宿女)。

大日・阿弥陀双式板碑。

◎大島海岸(志賀町大島)。

題目塔、石積六角塔。

◎福浦海岸(富来町福浦)。

腰巻地蔵、線刻地蔵

天候、交通事情等によって見学地を変更する場合があります。

○行き

新潟・富山方面↓金沢

普通 糸魚川発 6時40分 金沢着 9時10分

特急雷鳥20 富山発 8時36分 金沢着 9時30分

普通 富山発 8時14分 金沢着 9時25分

特急雷鳥26 新潟発 7時28分 金沢着 10時48分

福井方面↓金沢

快速 福井発 7時22分 金沢着 8時17分

普通 敦賀発 6時52分 金沢着 9時12分

普通 敦賀発 7時12分 金沢着 9時32分

○帰り

金沢↓富山・新潟方面

特急雷鳥25 金沢発 16時00分 新潟着 19時37分

普通 金沢発 16時41分 富山着 17時53分

金沢↓福井方面

特急しらさぎ14 金沢発 16時05分 敦賀着 17時28分

普通 金沢発 16時29分 富山着 19時10分

とんど一日庄川町から砺波市太田にかけて、歩いて石仏写真を撮られた道筋である。カメラは古い一眼レフのペンタックスであった。そして石仏にカメラを向ける視線が低く、身体全体しゃがみこむように石仏に接せられていた。私はその時、石仏を撮るのではなく、拜んでおられるのだなど強烈に感じた。

その時頂いたのが『野仏紀行』である。その中に「石仏と自身が同化するために、息を止め精神を統一する。シャッターに指をかけ、ほんのちよつと力を入れればシャッターがおろる。そういう状態で、来るべき一瞬を待っているのである。」とある。藤村さんは、石仏と同化するため写真を撮られていたのである。息を止め精神を統一し、もう今ごろ石仏に同化され、石仏になつておられるのかもしれない。

『藤村善雄先生追悼、業績集 努力・根性・持続 技術道と共に』  
(金沢工業大学出版局発行・平成七年十二月二十二日刊)より

### 新潟県 粟島の庚申(金精)様

平井 一雄

平成八年六月八〜九日 新潟県石仏の会と日本石仏協会共催の「粟島石仏探訪」に参加した。

北陸石仏の会から私と大野猪策氏の二人であったが、新潟

県と石仏協会合わせて三十五人の石仏愛好家が佐渡ヶ島よりもまだ北方の弧島に渡り中世板碑の多様さ、梵字名号塔の芸術性に魅了されたのである。

板碑の詳細は別に発表されているので省くが内浦集落を一周して目にした民俗信仰遺物のいくつかをカメラに収めたので紹介する。

1、庚申塔 蓮照院址板碑群 写真①

嘉永七年甲寅七月 高

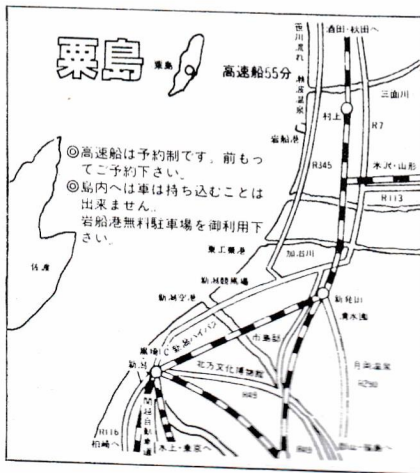
さ94 cm、幅47 cm

男根を意識した自然石に梵字(オン)を頭に庚申塔の文字を刻む。

2、前記板碑群に近い、たぶの木根元中世の阿弥陀仏

(磧石仏)の背後

自然石の男根石(銘はない)写真②



①蓮照院址の庚申塔



②男根石